

## 末永國明先生を偲ぶ



Kuramochi Saburo  
東京学芸大学名誉教授 倉持 三郎

文英堂の高校英語教科書 *UNICORN*, *POWWOW*, *Surfing* などの著者だった末永國明先生が去る6月18日、肺炎のため86歳で死去された。お悼み申し上げます。

先生は、1922年（大正11年）10月27日、茨城県水戸市でお生まれになった。水戸中学を卒業され、東京高等師範学校英語科に入られ、1944年に卒業され、東京文理科大学英語英文学科に入学し1947年に卒業された。先生が英語を学ばれていた頃は米英との戦争がはじまっており、英語は敵性語という烙印をおされた時代であり、ご苦労があったと思う。文理科大学で福原麟太郎先生の教えを受けられたことは先生にとって幸せであった。福原先生は、英語・英文学の専門雑誌「英語青年」の主幹として戦争末期も欠号を出さずに雑誌を守り抜いた人である。今、その頃の雑誌を読んでみると、そのレベルの高さに驚く。また福原研究室では鉄かぶとをかぶって毎週

金曜日に演習が続けられていた。終戦の直前の金曜日にも空襲の合間を縫って行われた。

末永先生の高等師範、文科大学の同窓生には、最近、東大、京大でベストセラーという『思考の整理学』の著者、外山滋比古先生がおられる。文科大学ではさらに、英語学の泰斗、太田朗先生が同級生に加わった。同級生たちが切磋琢磨した様子を想像できる。

先生は文理科大ご卒業後、東京都立第四中学校（後の都立戸山高校）や、東京高等師範附属中学校（後の東京教育大学附属高等学校）で教えられた。附属中学校時代にガリオア留学生としてノースカロライナ大学に1年間留学された。その後、東京教育大学文学部英語英文学科に移られ、助教授、教授となられた。教育大の廃校後は、埼玉大学に移られた。定年まで教えられたあと、文教大学に移られた。日本女子大学、早稲田大学などでも教えられた。長年の



東京教育大学大学院の会にて  
後列右から2番目が末永先生  
中列中央が倉持先生

教育、研究の功勞により平成10年勲三等を授与された。

私が東京教育大学の英文学科2年生のとき、私たちは大学祭で英語劇を上演することになり、先生にJohn Galsworthyの*A Little Man*を選んでいただいたのがお世話になる最初であった。翌年には、ある仕事のお手伝いをしながらお宅の2階に泊めていただき、ギルバート&サリバンのオペラのレコードを聞かせていただいた。大学院生の頃、たまたま友人とバーで飲んでいたら先生が現れて、私たちに一杯ウイスキーをおごって立ち去られた。先生のお宅での正月4日の新年会はごく最近まで続き、多くの教え子たちが集まり、奥様手作りのお料理に舌鼓をうった。

先生のご専門はアメリカ演劇であった。私が大学院生の頃、書店の棚に成田成寿先生との共訳、ダウンナー著『アメリカの現代劇』（1957年）が並んでいて、それを私はまぶしそうに眺めた。1959年、大学の紀要に発表された「Arthur Millerの世界」を友人と読んで意見を交わした。先生はミラーの『セールスマンの死』、そしてテネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』がお好きであった。またミュージカル研究の第一人者であられた。ご著書、『戦後アメリカ演劇の展開』（文英堂）のミュージカル論を今度読みかえしたが、ミュージカルに疎い私にもすっと頭に入るように書かれていて、改めて感銘を受けた。どうしてこんなに分かりやすいのかと考えたが、その理由は先生がミュージカルを楽しまれ、よくご存じだからだと思う。教科書の仕事の合間にミュージカルのひとふしを時折口ずさまれていた。

先生は最後の病床で、「南太平洋」の初演のCDを聞き、閉じていた目をぱっと開かれたという。

先生は俳人でもあられた。学生のころ加藤楸邨に激賞されたという句を、あるとき示された。



スピーチをする末永先生



勲三等叙勲時の末永先生



書斎での末永先生

### コスモスや寄宿舎ペンキ古りにけり

この句から一枚の絵が浮かぶ。先生が学ばれた高等師範の寄宿舎でもあろうか。木造の建物は古くなってペンキがはげかけている。その傍らには美しいコスモスの花が揺れている。寄宿舎の静とコスモスの動の対照や、古さと新鮮さの対照が見事である。

先生は約50年にわたって文英堂の高校用英語教科書を代表者として編纂された。UNICORN, POWWOW, Surfing など、改訂版を含めれば50冊くらいになるだろう。第1期のUNICORNは現場の先生方からあたたかく迎えられ、業界トップとなったことがあった。私はまず、UNICORNに参加させていただき、次にPOWWOWに移ったが、近くで先生のお言葉に耳を傾けながら、よい教科書を作る秘訣とは何かと考えた。それは先生がよく口にされた次の三つの言葉にまとめられるだろう。

一つは「不易流行」ということである。これは芭蕉のいう不易流行とは意味はやや違うが、「不易」というのは変わらないことであり、「流行」は世につれて変わるということである。教科書もそうである。指導法のように世の中の動きにつれて変わるものがあるが、愛とかヒューマンイズムの理想のように変わらないし、変わってはならないものが同時にある。教材はそれを考えて選ばなければならない。

次に「はっとする」が先生の口癖であった。これは俳句の作り方と同じではないかと思った。ただ

月並みの言葉を並べてみても名句にはならない。教科書も同じで、題材の内容でも、その展開の仕方でも、月並みでは生徒の興味を引かない。はっとさせねばならない。また生徒の「知的レベル」ということもよくおっしゃった。高校の生徒たちはたとえ英語はできなくても、知的レベルは高い。大人と同じと考えてよい。その知的レベルに合った内容にしないと生徒に飽きられる。英語力に気をとられて生徒の知的レベルを忘れてはならない。

最後に「きめ細かな配慮」である。鑿で木をけずり、彫像をつくるような丹念さがなければならない。「きめ細かな配慮」の一例として教科書の脚注の例文の内容がある。本文のイディオムの発展として本文とは別の文を脚注に出すのだが、簡単にすませるとすれば辞書の例文を少し変えて出せばよい。しかし、それでは、なかなか先生のOKがでない。そして1時間も考えたことがあった。生徒の身近なことで、それを読んでぱっと分かる内容でなければならない。

また、練習問題の作り方の「きめ細かな配慮」も思い出す。その課で習ったイディオムの練習として、それを使って英文をつくるという問題だとする。たとえば、consist of, according to, happen to, come into view のイディオムがあるとする。それを入れて1, 2, 3, 4というように別々に英文をつくることは比較的簡単である。しかし、それでは問題としての問題であってよくない。「1, 2, 3, 4をつなげて、一つのまとまった内容にしなければならない」と先生が提案された。たとえば、上の四つのイディオムを使って、山登りをした体験についての英文をつくるのである。習ったイディオムを全部使いながら、未習の単語やイディオムは入れてはならない。そして内容もできればはっとさせるものにする。これは大変だった。俳句を一句つくるようものだとよく思った。

先生は私たちが書いた英文を校閲される時、とくに idiomatic ということに注意された。先生はノースカロライナ大学留学時代、提出したレポートに“grammatically correct, but not idiomatic”と指導の教授に書かれたことをよく話してくださいました。この言葉を座右の銘にされていた。だれでも idiomatic な英語を書かねばならないことは頭では分かっているが、どうしたら書けるようになるのだ



ろうか。先生はあるとき、“Blow, blow, thou winter wind”ではじまる*As You Like It*のなかの歌を、あたかもミュージカルのひとふしを歌うように口ずさまれた。私はここまで暗記されているのかと驚き、これがidiomaticな英文を書ける秘密なのかと思いながら、同時に、これはいわゆる無理矢理にする暗記ではないと思った。英語の歌を楽しんでいるうちにリズムとともに自然と英語が頭の中に刻み込まれているのだと思った。これがidiomaticな英語を学習する理想と思った。

山田泰司先生、川端一男先生と共著の『ユニコン英和辞典』（文英堂）も大きなお仕事であった。高校生用の学習英和辞典としてはこの上ない辞典と思う。用例がセンテンスとして示されている。それに高校生程度の単語だけが使われていて、そのまま黒

板に書いても高校生が分かる英文である。schoolを引くと、英米の学校制度が出ている。高校生にとって必要な知識が与えられる。ひとりの教師が教える人数には限度がある。しかし、教科書や辞書はさらに広く教えることができるというのが先生の信条であった。それが体現されている。

先生は留学中、奥様のお着物を送ってもらって、懐かしんだという。先生を偲ぶ会の席上で奥様がおっしゃったが、病状が進み、先生が最後の覚悟をなさった頃のことである。先生と奥様のあいだに次のような内容の会話が交わされた。「ほくと暮らしてきて幸せだったかな」「60年間、本当に幸せでした」「それはよかった」「けんかなど一度もしたことはなかったでしょう」こういう夫婦愛こそ、先生を支え、大きなお仕事を進める原動力になったと思う。



末永先生と奥様